

毎年、3月から4月にかけて公園へ出かけると、独特な春の空気を感じる。冬の寒い時期をすぎ、暖かくなり始めるころである。新緑の匂いなのかもしれない。今思つと、60年以上この空気を吸ってきた。この空気を吸うと中学や大学に入学したころ、会社に入り社会人となったとき、また、異動になって場所を変え新天地で迎えたころを思い出す。

しかし、今年は、いつもと感覚が違う。1月から2月にかけて、比較的暖かい日が続き、桜の開花が例年になく早くなっている。また、桜の開花期間も長い。これが、原因だと感じる。いわゆる温室効果ガス（二酸化炭素）の排出量の増加

新型コロナウイルスは、地球温暖化対策に転換をもたらすか？



に伴う地球温暖化の影響だ。地球温暖化は多くの異常気象を発生させる。記憶に新しいのは、一昨年発生した関西連絡橋にタンカーが衝突する事故をもたらした大型台風や去年の二つの台風だ。去年の台風15号と19号は、記録的な豪雨・強風により、河川の氾濫やがけ崩れを発生させ、多くの死者を出すなど、極めて甚大な被害をもたらした。台風の勢力は、年を追うごとに強力にまた影響範囲が広域にわたってきている。

一方、世界に蔓延する新型コロナウイルスの影響で、多くの主要都市が封鎖され、経済活動が制限された。その結果、二酸化炭素排出量は、各国で大幅に削減されている。例えば、中国の今年の2月では、二酸化炭素の排出量が去年の同時期に比較して25%マイナスという報告もある。これは、経済を含めた人の活動と二酸化炭素排出量との関係があるという事を明らかにした形だ。世界各国がパリ協定で設定された目標の達成に向け、具体的なアクションを腐心していることを考えると皮肉な結果である。

しかし、新型コロナウイルスがいずれ沈静化され、経済活動を再び活発化させると二酸化炭素排出量は、以前よりも増加してしまうというところも懸念されている。目の前の新型コロナウイルスの問題が解決された後には、地球温暖化の問題が依然として残っており、さらに深刻化していくという事を忘れてはいけない。コロナショックを有意義な機会ととらえ、化石燃料に代替する再生エネルギーの開発に頼るばかりでなく、仕事のやり方・生活の在り方を大幅に見直すことにより二酸化炭素排出量を抑えつつ、かつ経済活動を促進できるような方法を模索すべきだ。何年か後に振り返ってみて2020年の春は、この二つの問題を解決され、こうだったと思ひ出されるような過去であってほしいと思う。